

明倫短期大学研究会講演抄録

金属アレルギーのパッチテストの方法

中澤 孝敏 助手（歯科技工士学科）

最近では“アレルギー”という言葉が日常生活の中に定着しきったような気がします。なぜ、どうしてこの病気が起きるのでしょうか、今、なんのアレルギー症状もない人も、将来発症する可能性もありますし、決してアレルギーは他人事ではないのです。毎日の生活の中で特に金属に取り囲まれていると言っても過言ではないでしょう。そこでアレルギー性皮膚疾患の検査薬“パッチテスト試薬金属”を紹介した。金属アレルギーのアレルゲンの確認と予防について考えました。

第66回：2001年10月25日（木）

人間工学による作業環境改善に関する研究

植木 一範 講師（歯科技工士学科）

医療従事者にとって作業環境や道具類は、集中力の持続や疲労軽減のために、使いやすさを十分に考慮して設計される必要がある。そのためには人間工学的アプローチによって作業者の体形や作業姿勢などを調査した上で、各々の環境に適應する考察が有効であると思われる。本研究では、歯科医師、歯科技工士、歯科衛生士共通として、器具などを“持つ”という動作に着目し、人間工学的に使いやすい形状について考察を行ったので報告した。

高齢社会に対する若者の意識調査～医療従事者をめざす本学学生の場合～

渡辺 美幸 助手（歯科衛生士学科）

現代の若者が高齢社会や介護の問題をどう捉えているか、その実態を歯科技工士・歯科衛生士を目指す本学学生を対象に調査した。高齢社会への認識はまだ浅いが、老人に対して優しい、穏やか、頑固、うるさいというイメージを持っていた。将来的に、両親が健康なうちは別居し、寝たきりや痴呆等になった場合は同居して在宅で介護したいと考えている学生が255人中175人（68%）いた。

本調査で得た学生の気質を考慮し、訪問歯科診療や歯科口腔介護実習の指導にあたりたい。

第67回：2001年11月8日（木）

歯科技工における感染と予防対策について

丸山 満 助手（歯科技工士学科）

歯科技工は間接的に患者の口腔内と関わる職域である。模型や口腔内に試適された技工物に、唾液や血液が付着したものを目にする可能性がある。ウィルスはそれらを介して感染することから、取り扱う側も感染する可能性は否定できない。歯科技工士も感染症や予防対策および対処法についての知識を持つ必要性があり、院内感染の防止、加えて健康を損なう因子に対する自己防衛意識の向上にも役立つものと思われる。

プリオン病とは何か？ ークロイツフェルト・ヤコブ病と狂牛病ー

福島 祥紘 教授（歯科衛生士学科）

本邦1例目の狂牛病の牛が発見されて、ヒトへの感染の恐怖が日本中に蔓延している。この新しい感染症は未だ不明の点が多いが、現段階で判明しているプリオン病についての知識を総括した。プリオン蛋白（正常と異常型）の構造と推定されている感染のメカニズム、動物間の差異、ヒト及び動物のプリオン病の症状と診断について述べ、同時に厚生労働省のプリオン病の全国調査の内容を紹介した。

第68回：2001年11月29日（木）

歯科臨床と院内感染

市川伸彦、田辺祥子、佐々木加津之 歯科医師
（附属歯科診療所）

近年、院内感染の報道を目にする機会が多い。外科系診療科である歯科において、感染防止は良好な予後の為に重要である。携わる人の手指と意識、感染源からの汚染回避、感染源の拡散防止、汚染物の消毒・滅菌の点から歯科臨床の課題として考察した。実際には多くの問題点が存在する。その解決には、全スタッフの協力と継続的努力により複雑に関わった問題の解決を図ることが重要であるといえる。